

# 問題解決的学習を目指す道徳の授業実践：「およげないりすさん」を使って

文学部 教育学科

教授 田 中 美紀子

## I はじめに

平成 26 年 10 月の中央教育審議会の答申「道徳に係る教育課程の改善等について」において、「特別の教科 道徳」（仮称）の設置が提言された。この答申を踏まえて平成 27 年 3 月には、学校教育法施行規則の一部が改正され、小学校、中学校及び特別支援学校小学部・中学部の教育課程における「道徳」は、「特別の教科である道徳」となった。<sup>1</sup>また、学習指導要領の一部も改正され、従来の「道徳の時間」は、小学校では平成 30 年度から、中学校では平成 31 年度から特別の教科としての「道徳科」となることが明示され、「道徳科」の目標や学習内容も学習指導要領の中で体系的に、詳細に示された。<sup>2</sup>

今までの「道徳の時間」では、児童生徒が道徳の読み物資料を読んで、登場人物の「気持ち」を読み取り、共感し、そこから学ぶという、いわゆる「読み取り道徳」の授業形態が主であったし、そのような授業の中で教師が行う発問のほとんどは、児童生徒の読解力や理解力を問うようなものであった。だが、新しい「道徳科」では「読み取り道徳」から「考える道徳」、「議論する道徳」への転換が図られることになった。あわせて、他者との摩擦やいじめ問題など、現実の生活で遭遇する多種多様な課題に対処する児童生徒の能力を養うために、「道徳科」の授業では「問題解決的な学習」を充実させることが目標として掲げられている。では、どのような授業を行えば、児童生徒に考える機会を与え、議論を活発に行わせ、問題の解決策を探させることができるのだろうか。

## II 問題解決的学習の実践

以下に、一つの読み物資料を例として取り上げ、「道徳科」の授業で「問題解決的な学習」を実践する一つの案を述べたい。ここで使用するのは、小学校低学年向けの物語「およげないりすさん」<sup>3</sup>である。

### 1. 話のあらすじ

池のほとりで、あひる、かめ、はくちょうが、池の中の島へ行って遊ぶ相談をしている。そこへりすがやってきて、みんなといっしょに島へ行きたくなり、「つれていって」と頼んだ。ところが、「りすさんは、およげないからだめ。」と断われた。あひるとかめとはくちょうは、りすを残して、島へ泳いで行ってしまう。島にはすべり台やブランコがあり、みんなはそれでしばらく遊んでいたが、少しも楽しくない。そして、りすがいたほうがいい、とみんなは気づく。そこでかめは、ある考えを思いつく。

次の日、りすが池のほとりへ行くと「きのうは、ごめんね。」「今日は、りすさんといっしょにしまへ行こうよ。」とはくちょうとあひるが言う。かめは、「ぼくのせ中にのりなさいよ。」とりすに言う。りすは、にこにこしながら、かめの背中に乗り、みんなで島へ行く。

### 2. 指導案

#### (1) 従来の指導案

「およげないりすさん」は小学校の道徳のさまざまな読み物資料集に取り上げられてきた有名な教材

である。話の中では、小学校低学年の興味を引くために、泳げる動物と泳げない動物を登場させており、前者が後者を助けるという分かりやすい構図になっている。この資料を使った授業の展開は、まず資料を読み、登場人物(動物)を把握し、話の成り行きを理解し、一人ぼっちにされたりすの気持ちを考え、かめのやさしさに共感し、助け合いの大切さを学ぶというのが定石であった。いわば、「気持ち重視」の授業を通して、他者の心情を理解し、他者に優しくすることが美德として教えられてきたのである。だが、多角的に問題を考え、独自に解決方法を見出だし、実行に移す能力を養うという点は、まったく度外視されてきた。

## (2) 問題解決的学習に導く指導案

では、この資料を使って、「気持ち重視」の授業から脱却し、「問題解決的な学習」を目指す授業への転換はどのように可能であろうか。ポイントは、児童にこの資料を最後まで読ませないことである。つまり、物語をいったん中断させるのである。その分かれ目は、かめが「いい考えがある」と言った後に設定するべきである。資料を読み進めるとわかることだが、その「考え」とは、かめがりすを自分の背中に乗せて島まで運ぶということである。その展開を伏せて、児童に解決策を考えさせることを筆者は提案する。そのねらいは、子どもたちの自我関与の意識を高めることであり、自ら問題に対峙し、問題の所在を判断し、主体的に問題解決を行う実践力を身につけさせることである。具体的には、「かめさんは、どういうことを考えたのでしょうか」とか「あなたなら、およげないりすさんのためにどうしますか」という発問を教師が授業中に行うのである。児童がそこでいろいろな案を出し合うことが予想されるだろう。例えば、「島へ渡る橋を作る」とか、「いかだを作って、それに乗ってみんなで島まで行く」というように、何か道具を創造したり、「池の水を抜く」という意外な発想を思いつく子どももいるだろう。また、最新のテクノロジーを使い、「ドローンでりすを運ぶ」というアイデアを出したり、「島に行かずに、池のほとりに遊び場をつくる」という子どももいるだろう。はたまた、「ドラえもんを呼んでりすを運んでもらう」という突飛なアイデアが出るかもしれない。要するに、資料を最後まで読ませずに中断し、子どもたちに自由に考えさせる時間を作り、多様な解決策を発見させることが大事なのである。

この読み物資料にはたった一つの解決策しか提示されておらず、子どもたちがそれを読み取るだけなら受動的な学習しか行われないことになる。そのような資料に沿った授業は、退屈極まりないだろう。自分で解決策を考えたいわけではないので、子どもたちの心には何も残らない。「問題解決的な学習」を目指すなら、児童が解決策を自ら見つけ、実行可能かどうかを判断し、行動に移す力を養うような授業を行う必要がある。物語を読んで、そこに含まれる道徳的問題状況を把握し、課題を見つけ、解決策を考ええるという段階を踏んでこそ、現実において直面するであろう問題に対処する力を児童自身が身につけることができるのである。単なる読み物としての「いいお話」は、聞いていて心地よいし、感動を呼び起こすだろうが、記憶には残らない。児童が、その物語の中に入っていき、問題となる状況に身を置き、自身との関わりを想像することが大事なのである。以上の見解を踏まえて、下記に1年生を対象とした道徳科の学習指導案の一例を挙げる。

第1学年〇組 道徳科学習指導案			
平成〇〇年〇月〇日（ ）第〇時限 指導者：			
1. 主題 困っているともだちを助けて、みんなで楽しく遊ぼう（内容項目 B-(9) 友達と仲よくし、助け合うこと）			
2. 資料名 「およねいりすさん」（『わたしたちの道徳 小学校1・2年』、pp. 78-81.）			
<b>3. 主題設定の理由</b> (1) ねらいと価値について いじめ問題への対応として、友情、信頼などについて考えさせる。仲間外れをせずに、困っている友人を助け、思いやる心情を培い、具体的な方策を考える能力を養う。 (2) 児童の実態について 仲間外れをせずに、みんなで仲良く遊んだり、学んだりする習慣を身につけてほしい。能力が劣っている友人を積極的に助ける実践的態度を学ばせたい。 (3) 資料について 資料の中の物語は、島に渡るときに、泳げないりすを泳げる動物が助けるという分かりやすい構図をなしている。イラストが理解を助ける。			
<b>4. 展開</b>			
	学習活動	教師の発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
導入 5分	友人について考える。	(○：教師、◇：児童) ○「一緒にいて楽しいなと思うともだちは、どんなともだちですか」 ◇「近所の子」「同級生」 ○「どんなことをして遊びますか」 ◇「おにごっこ」「ゲーム」「サッカー」	自分の身近な友人について考えさせ、友情に関心を向けさせる。
展開 30分	1. 教師が資料を途中まで読む。(p.80、5行目まで) 2. クラスで意見を述べあう。 3. 解決案についてペアで話しあう。 4. 発表する。 5. 教師が資料の残りの部分を読む。かめさんの案について考える。	○「あひるさんたちに、泳げないからダメと言われたときのりすさんの気持ちはどうだったでしょう」 ◇「さみしい」、「悲しい」、「みんなとあそびたいのに、どうしよう」、「ひとりぼっちはいや」 ○「かめさんは、どんな案を思いついたのでしょうか」「あなたならどんな案を思いつきますか」 ◇「島に行かずに他の場所で、りすさんも入れてみんなで遊ぶ」「船を作ってみんなで島に行く」「ドローンでりすさんを島まで運ぶ」 ○「かめさんの案についてどう思いますか」 ◇「かめさんはしんどいのに、えらい」	資料のイラストを活用する。 場面状況を理解するための発問を行う。仲間外れにされたりりすさんの心情を理解させる。 資料を終わりまで読ませずに、かめさんの解決策を想像させる。 独自の具体的な問題解決案を考えさせる。
終末 10分	これまでの生活をふりかえり、友情の大切さを思い出す。将来に向けての心構えを考える。	○「ともだちと仲よくして、楽しかったことやうれしかったことを、絵や文でかきましょう」 ○「これから友達とどのような関係をきずいていきたいですか」 ◇「ともだちが困っているときは何とかしてたすけてあげる」	感情を視覚化する。
<b>5. 本時の評価</b> 友達と一緒に遊べないりすさんの気持ちを理解できたか。かめさんの思いやりや友情に共感できたか。助け合いの大事さをつかめたか。問題を解決する手だてを考えようとしたか。具体的な方策を思いついたか。自分の友人関係をどのようなものにしたいか、自分の意見を持っているか。			

### Ⅲ おわりに

子どもたちは誰でも、困難な状況において自ら問題に対峙し、自分の想像力と思考力を駆使して問題の解決策を模索し、それを実行に移す資質を潜在的に持っていると考えられる。最初から一つだけの解決策を提示することは、その資質を抑制こそすれ、向上させることにはつながらない。問題解決の答えは決して一つだけではない。児童ひとりひとりが、自ら考え、アイデアを絞りだし、意見を交換し、議論しながらより良い解決策を見つける能力を身につけることが、新しい「道徳科」が標榜する「問題解決的な学習」の目指すところである。

- 
- 1 私立学校においては宗教をもって道徳に代えることができる。
  - 2 [https://doutoku.mext.go.jp/pdf/elementary\\_school\\_02.pdf](https://doutoku.mext.go.jp/pdf/elementary_school_02.pdf)『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』文部科学省、平成 27 年 7 月) p.2. 平成 29 年 11 月 1 日閲覧。
  - 3 文部科学省『わたしたちの道徳 小学校 1・2 年』、文溪堂、平成 26 年、pp.78-81.